

# ホッブズ周辺から

服部 良一

母は「私と恐怖の双生児を生んだ」——リウアイアワンの著者トーマス・ホッブズ(1588年—1679年)は晩年自らの伝記をラテン語の詩の形式を仮りて、そのように表白する。彼の母はスペイン必勝艦隊未冠の海に、恐怖の双生児——月足りまでトーマスを生んだのである。「恐怖の双生児」それはまことに、苛酷なホッブズの表現である。しかしそれは假仮体系づけられた独自の政治哲学によせるひそかな自費と出主の偶然性に仮託したと思えなくもない。「恐怖」それは市民の一般感情であり、戦争と暴力死に対する恐怖の念に媒介された自然理性を根拠とする国家契約説を展開したのである。

ともあれ、ホッブズはインスランド、ウイルトンマのマーメスベリ附近ウエストボート村の貧しい牧師の子として生れる。短気な凡庸の父は、自ッ巻き起した暴力沙汰の追末の手を恐れて逐電する。トーマスは手袋商へとして成功して、伯父の援助により、オックスフォード大学を卒える。大学の推薦で、彼はハードウイック男爵ウイリアム・カウエンティッシュ(後年初代テウオンシア伯爵)の息子(の家庭教師となる、ホッブズとカウエンティッシュ家との友情は一六〇八年以来、彼の死に至るまで七〇年に及ぶ。その間、伯爵の死去を契機として、伯爵

家の財政整理のため一時解雇され、サー・ジャームズ・フリフトンの子の家庭教師として、その外遊に随伴した三年間の断絶はあるとしても……。

ホッブズが新しい世界の輝かしいものを探るために、瞑想的憂鬱性のオックスフォードの霧を身辺から一掃することが先決となろう。カウエンティッシュ家との幸福な出会いは、それを扶ける。ヨーロッパの新知識人と接觸の機会を得た外遊、そして思索する十分の閑暇、それらは後年、ホッブズが大輪の花を咲かせる豊みぶ土壌を整えた。その頃彼はベーコンと識る。ベーコンが思索にふけりながら逍遙するとき、内心想念を随伴者に伝える、こうした際、ホッブズは最も要領よくベーコンの意図を捕捉し表現して、ベーコンを満足させたのである。ホッブズの才に達した彼は、初めてユークリッド幾何学を知つて驚喜する。幾何学を恋人としてそのように正確な政治哲学を打ち立てようと想到する。更にテウオンシア伯爵家に再び迎えられて、彼の才を外遊でマリレイに面接し、受難の碩学から激励されて、自然科学的方途への彼の熱意は一層強められる。フランスではメルセンヌ、カセンティッシュと交わり、後に彼らを通じて、

テカルトとも相識る。

革命の氣配濃厚な一六四〇年頃、彼はその政治哲学の英文作を發表、未出版であるが、写本で入函々に秘蔵り、好評である。すなわち「法字綱要 *The Elements of Laws*」である。

この年、革命の飛沫を恐れ、遂早くフランスへ亡命する。二年後「市民論 *De Civitate*」がパリで出版される。前序して亡命して来た王太子チャールスの教学進講を担当する。英本国では革命の標相は敬しく、終に国王チャールス一世は剋刑される。フロンエルの指導下に共和政治は展開する。寄る手紙に心細く帰国を切望するホッススは、「リウアイアワン *Leveitsthan*」を著す（一六五一）。多くの人に読まれたと、他の著述がラテン語で出されたのに、リウアイアワンは英語で書かれる。絶對主義好みのホッススの著作は、フロンエルの体制を合法化する理論とも読み得たのである。翌年、ホッススは帰国を許される。その後、彼は「物体論 *De Corpore*」（一六五五）次いで「人間論 *De Homine*」（一六五八）を發表して、その哲学体系を完成する。「物体論」を基礎とする「人間論」、最上層の「市民論」がそれであるが、リウアイアワンは、人間論と市民論を併せ述べたものである。リウアイアワンは彼の哲学体系の完成以前に、それを公表することを彼は刻下の急務と感じたのである。

やがて、フロンエルの死に付き、共和政は終焉、王政復古が成る。帰国した新王チャールス二世によつて、ホッススは歓迎され、宮廷に自由に入居することと認められる。国王の表現を假れば、彼は「群小の獵犬をけしかける白熊」であつた。疾

病の流行、ロンドンの大火とつゞく利々しい零面氣のなかに、ホッススの著作の無神論的傾向への非難が高まる。終にリウアイアワンは発行停止処分を受ける。彼自身もまた異端者として宗教裁判に付されることを恐れる。テウオンシア伯などのとりなしで、危機を脱したのみ、彼は慌々として、努めて、教会の初禱会などにも出席する。かゝる態度は、彼の自任する「臆病者」の姿態をさし出しているとも思われる。

なるほどホッススは性未、夜の闇、盗入、敵手による迫害、そして死を、彼が暴拳と呼ぶところのものを恐れ、しかし、果して彼は臆病者だつたのか？ 彼の批判家たちは好んで云う、ホッススの恐怖は内心の罪の表白の一種であつたこと、それは彼の無神論に対する良心の苛責であつたのである。しかし、それはパラドックスである。彼は冒險的探究心に富む恐怖の人であつた。彼の知性は大胆且つ男性的であつた。彼は傑出伝統へ為したその強烈さから決してたじろがなかつた。大陸の論敵、ドイツ法制史家コンリンギウス *Herman Conringius* (1606-81) が、ホッススに特名して「無鉄砲 *Kennarische*」と付したのは当りぬことではない。当代の作家オースリー *John Aubrey* が見たように、それは實際「巨大 *Prodigious*」であつた。すなわち「幼時から彼の性末の臆病も……その精神の強い熱情と活刀を冷却さすこととできなかった。その熱情を彼の死に至るまで驚異的に持続したのであつた」九十一年の生涯、全く彼は「恐いもの知り手 *Knows no terrors*」であつた。彼は新しい豪放な思想を求め、飽くまでも恐るゝことを知らなかつたのである。究も一恐怖なき身に造られた「リウ

ス

アイアサンが、地上最強の誇の王者に国家の姿態を連想する如く、哲学者におけるホッススの態様に、「誇の王者」を希求しなかつたであらうか、彼は「物体論」のみで、テウオンシア伯への献辞を述べて、天文学の端緒はコペルニクスに発し、自然哲学はガリレイより古かつたとなし、「国家哲学に至つては、更に遙かに若く、それは私の『市民論』よりも手長ではないのであります」と国家哲学の創始者であることを自負するのである。

リウアイアサンが公表されるや、その反響は大きく、復讐さまでまのものがあつた。「オセアナ Oceana」の著者ハリント James Harrington (1611-77) にしろ、ロック John Locke (1632-1704) にしろ、その思想形成にホッススから大きな糧を獲たのである。彼を并難する聲は当然、王党側から挙げられる。クラレンドン伯爵 *Carle of Clarendon*,

*Edward Hyde (1609-74)* もまたその一人であり、「ホッスス氏の著書における教会と国家に対する危険にして有害なる誤謬についての小論」(1670)を發表し、チャールズ二世に就じたのである。彼は個人的にはその人格、識見に敬服するも、ホッススの思想は危険極まりなきものと排撃するのである。その革命許容の契約説と宗教蔑視は「私はこんなに多くの騷擾、謀反、不誠実を内蔵した書物を讀んだことはありません」と言わしめる。クラレンドンは、ホッススの貴族に対する極端な悪意を、そのパンによつて扶養せられていくせに……と皮肉る。何人も出生と家系による特権を認めないとするホッススの立場は本平派と一致すると彼が指摘するのは正しい。

ホッスス理論の特徴を示す二つの側面、すなわち、その契約説と主権の絶対不可分論は必しも彼の獨創性を主張し得まい。契約説は大陸において、カルピンの流れを汲む人々の革命の理論として採用され未つたものであり、古典ギリシアに淵源を發する自然法に基づき、暴君に対する請求権 *ius petendi* *contra tyrannos* という形に出たものである。また主権不可分論は前代にボーム J. Bodin (1530-96) により述べられていた。この場合、ホッススの獨創性は性善説的根柢がウを發せられた恐怖の自然理性によつて、契約と主権不可分の二説を統一的に体系化した点であろう。彼の理論の致命的な欠陥として、國家の起能の積極面を無視していること、秩序維持の警官としての消極面、必竟、國家を必要悪としか見ていないことが指摘される。それはやはり、彼も時代の子であり、國家に何ら積極的起能を期待し得ない乱世に生きて、一般市民の希求としての秩序の保障を、最低限の否、最も現実的な願望として國家に懇請したことは当然であろう。

次に私はホッススが批判されるその反歴史性について若干の考察を試みたい。

リウアイアサンに於てその反歴史性が問題にされるのはその自然状態の説明に關してである。メーン *St. Henry Sumner Maine (Ancient Law)* もその点を指摘する。ホッススは「人間が恰も畜のように突然、土壌から頭を揚げ」互に何々の拘束もなしに成長したと仮定した場合の自然状態を規定する。自然は人間の能力を平等に作る故に、目的達成に希望の平等性あり、それが競争心、猜疑、名譽心を煽り「人間が人間に對

「狼 *homo homine lupus*」たゞしめ「万人の万人に  
対する事 *Bellum omnium contra omnes*」に導くとする  
のである。メソンの指摘する如く、ホッブスの想定は歴史的事  
実ではない。このようなアトム的性悪説に基づく自然状態の説  
明に中世以来の伝統的神学の影響の存することは看過できない  
。すなわち、原罪による樂園追放、人間の墮落という神学的理  
念が背後に強く働いている点である。ともあれ「万人対万人の  
争い」の自然状態が仮空の設定であることは、ホッブス自身、充  
分知悉している筈である。原始時代、アルマニアに於ても、族  
父長的専制権力下の無数の小集団があつたのであり、それら  
集団相互間の戦争状態の想定は可能であつても、個々バラバラ  
に孤立した人間の相争う自然状態は、非歴史的な空想的所産に  
過ぎない。彼もリウ・アイアワンのなかで「このような戦争時代  
または戦争状態は決して存在しなかつたと、恐つく考へられる  
かもしれない。私も決して全世界に亘つて一般的にそんなので  
はなかつたと信じている」それでは彼の意圖する処は何であつ  
たか？当時、新大陸アメリカの野蛮民族の異態——小部族間に  
於ける自然的、衝動的戦争状態からも、それを終結させる強固  
な国家権力が要請されねばならない。必竟、彼は人間精神の原  
初構造かくも宿命的な戦争を、暴力死を恐怖する自然理性がそ  
れを克服せんとするタイフニックな過程に、絶対国家を契約す  
ることと強調したたつたのである。ホッブスの契約説は所謂國  
家契約説であり、弱者の自覚に発する絶対者との謂わば上下の  
契約である。これは社会契約説が対等者相互の契約とする場合  
と異なり「身分から契約へ」中世から近代への運動のまさに中

間境を為すものと云つて良いであらう。

ホッブスの「自然状態」の反歴史性が批判されるにも不拘  
シユトラウス *Leo Strauss* はホッブスの政治哲学の基本的  
構造に内含するその歴史性に注目する。すなわち、ホッブスが  
アリストートル「発生論的方法 *genetic method*」を採り、  
「綜合的方法 *comparative method*」を採る共に、ヘーゲル  
への道を開いたものとして評価するのである。その点に因して  
、以下若干の考察を試みたい。

ホッブスの歴史への出発点は、彼が若き日に大学で学び上つ  
たものを克服することであつた。大学の伝統的教養はなおスコ  
ラチズム、すなわちアリストテリアニズムが支配的であつた  
。アリストートルの倫理は時・処・個人の経験を超越した普遍  
的合理的教訓を説くものであつた。しかもアリストートル自身  
その教説が凡ての人間を律し得ないことを認めざるを得なかつ  
た。一般人間の眞実は、正義や名誉を愛する高貴な精神に、必  
ずしも随わない。一層別種の動機で行動する、すなわち情意  
*passion* である。彼にとつて、パッションはその哲学体系を  
はみ出る非合理的枝雜物に過ぎなかつたのである。普遍的合理  
的教訓の有効性の疑問から、ホッブスは理性の無力を痛感する  
。それには、現実的傾向を有したペーコンの影響も否めまい。  
アリストートルの政治哲学が、原始のポリスから完成された姿  
を要請し、随つて、それを構成する完全なあるべき人間の姿が  
想定される。いわば、その市民像は上からの所与としての靜的  
、横断的性格のものであつた。ホッブスはそれに嫌ひない、彼  
は自然な人間の在る姿から発足する。それは理性的というより

は、寧ろ情意の面から、探究する立場である。人間の在る姿を如実に見定めようとする場合、こゝに「歴史」がクロローズアツスされる。歴史は科学樹立者アリストートルにより、その法則性の欠如から、不当に貶されて来たものであつた。自由意思に基づくイデアの追求が哲学とすれば、人間の存外他律的一面を衝いて、服従を強制する領域は法学に任せられよう。歴史はこの哲学と法学と二つの極の中間に位する事実の学であつた。勿論それは単なる事実蒐集を以て、能事了れりとする態のものではないが、別途、応用加工さるべき在庫資料的意味をもつものであつた。随つて、奉仕性が強調される実用的・教訓的段階の歴史であつた。歴史は貴族主義的教養激励の手段であつた。千載書史に列す式の貴族的・英雄的徳目鼓吹の用具とされたのである。ホッブズはこの歴史を一般市民的立場から活用せんとしたのである。彼のアリストートルから歴史へ同心の転換は、その最初の道標を一六二九年、分別が現実的傾向を重厚ならしめる四〇才を越えて、打ち樹てたのである。すなわち、彼がその前年、当主の死により評任したテウオンシア伯の幼主に、ツキテイテスの「歴史」の英訳を完成して献じている、それはツキテイテスの実証的科学精神に対する共鳴と假自身の政治哲学への関心が生んだのである。やがてアリストン家の息子と案内する彼の第二外遊の際、彼はある貴族の邸で、ゆくりなくもユークリッド幾何学を発見する。このユークリッドとの出会いは、万人を言せしめる幾何学的政治哲学への思慕として、彼の志向を決定する。その政治哲学が一面、図式的・機械論的明徴性を有すとしても、敢て不思議ではない。非歴史性を批判される

その自然状態の説明も、幾何学における「仮設」を連想させる。最も現実的秩序としての絶対国家の創設を「証明」するに勿く不可決然な必要前提条件であつたと考えられよう。

さきに指摘した如く、シュトラウスがホッブズを以てヘーゲルの先隣とする所以は、その弁証法的相似に基づく。「自然状態から絶対国家へ」のホッブズと、「自然意識から絶対精神へ」のヘーゲルの場合と弁証法的発展の径路は全く一致する。即目的なるものとして、「仮設」の自然状態或いは自然意識を前提としたこと、そして自然状態まだ自然意識がそれ自身のなかにそれ自身を否定する対自的なるものを産出する。ホッブズの場合、自然状態のなから、暴力死を恐怖する自然理性が自覚され、自然状態を否定せんとする。ヘーゲルでは、自然意識が意識の幼年期から自由の意識の幼年期から自由の意識を対自的に持つ青年期への移行である。そして終局は統一の段階、即自的なるものとの対自的なるものを止揚する現実的段階である。

ヘーゲルは回歸を完成した精神の老年期、ブルマン民族による自由の実現を説くのである。これに対してホッブズの弁証法は、一革命の動乱期に生きて、市民的立場に何よりも希求する平和と静謐の保障として、国家の絶対性の確立を思索したのであつた。

以上の如く、ホッブズはその弁証法的回歸によつて、古い野蛮からより優れた現代へのダイナミックな発展を跡付けた。それは超越的な永遠の秩序という所与の械具から解放されて、人向性の主体を回復したことを意味する。それはまた、歴史における主体性の確立と令義語である。歴史の主宰者は人間それ自

身であるという自覚である。近代史学はその自覚から生誕した  
のである。歴史主義の勝利はホッススもまた巨歩を進めたもの  
と断言してもよいであろう。 (昭和四一・六・六)

以上

参考文献

Thomas Hobbes: Leviathan Everyman's Library  
Leo Strauss: The Political Philosophy of Hobbes

The Univ. of Chicago

Samuel G. Mintz: The Hunting of Leviathan Cambridge  
Christopher Hill: Puritanism Monarchy Books

ホッスス著

リヴァイアサン

上・下

岩波文庫

水田洋訳

イギリス革命

思想史的研究

御茶の水書房

水田洋編  
G. P. 著  
堀 豊 彦 訳

イギリス政治思想

I

岩波書房

外味準之輔